

## 平成 29 年度防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書

学校名：岩手県立不来方高等学校

**I 事業の概要（地域の実情含む）**

- (1) 所在地域の災害リスク対応
- (2) 社会的環境の特性対応
- (3) 災害ボランティア活動

**II 取組の概要**

- (1) 所在地域の災害リスク対応
  - ア 火災避難訓練
    - ・予告無し避難訓練の実施
    - ・ドライアイスを用いて出火場所の疑似演出
    - ・防火扉・シャッターを活用し通行不具合の体験
    - ・消防署員による分析指導
  - イ 地震避難訓練
    - ・災害時を想定、通行不可区域を設置した訓練
    - ・県警本部警備部災害対策室長による講演
- (2) 社会的環境の特性対応
  - ア 帰宅困難時の安全教育
    - ・盛岡地方気象台職員を招聘してのワークショップ
  - イ 体育館滞留予行
    - ・防災マットの設置及び滞留体験
    - ・防災シートを用いての滞留体験
  - ウ 緊急時の食事づくり
    - ・カセットコンロを用いての炊飯
    - ・食材（缶詰、調味料）を限定して用意し、レシピ無しの調理
- (3) 災害ボランティア活動
  - ア 山田町仮設住宅ボランティア
    - ・生徒体験型交流（お茶・書道・染め物・絵本読み聞かせ・ちぎり絵）
    - ・本校音楽部と「コーラス泉の会」との交流合唱

**III 取組の成果と課題**

## (1) 成果

①火災避難訓練では、昼休みに予告無しで行った。生徒は臨機応変に対応できたが、職員に対して厳しい目が向けられた。マニュアル化されない臨機応変な対応がより一層必要だと確認できた。また訓練終了間際に実際に町内で火災が発生し、その場が騒然となった。

②地震避難訓練では、迅速に通行不可区域を回避しながら集合場所に到着することができた。その後の講演では、「震災を想定した避難の注意点」と題し、実体験を交えながら危機管理の大切さを教示され、より一層、地震時対応の理解が深まった。

③帰宅困難時の安全教育では、大雨を想定した「気象災害ワークショップ」を実施した。各班ともに、違う条件を出されたが、一つずつ課題をクリアしながら発表を行った。本校所在地である矢巾町も水害に襲われており、危機管理の大切さと、避難する時の考え方を理解することができた。

④体育館滞留予行では、協力しながら知恵を出し合い、短時間で組み立てることを体験した。また、防災シートの体験では、保温力の高さを体感することができた。

⑤緊急時の食事づくりでは、カセットコンロのガス装着が初めての生徒がいた。また、鍋で炊飯する難しさを体験した。また食材（缶詰、調味料等）を限定し、レシピ無しの調理を課した。試行錯誤しながら行った班が多く、協力することの大切さ、臨機応変に対応する力などを養うことができた。

⑥山田町ボランティアでは、本校ならではの催し物の文化交流を主としているが、実際に復興風景を見ながら、地域住民と行政との齟齬を聞き、現在の被災地の様子が一人ひとりの心に深く刻まれた。また、生徒、地域住民にとっても笑顔の溢れる交流になった。

## (2) 課題

火災避難訓練では、「訓練は訓練として行うため、予告がほしい」と望む職員もおり、失敗しないように導きたい気持ちが垣間見える。しかしながら、災害時には生徒を守るため、臨機応変な対応力が必要になるため、生徒、職員ともに、より制約型の訓練が必要である。また、地震避難訓練後の生徒アンケートには「訓練は抜き打ちでやるべきだ」「災害時に担任がその場にいるとは限らない」と前向きな意見もあったが、考査1週間前に実施したため「訓練を考査前にやらないでもらいたい」という生徒もいた。内陸部にいるためか震災は過去のことと位置づけている生徒もいるように感じるため、復興教育を含め、防災教育の充実が更に必要である。